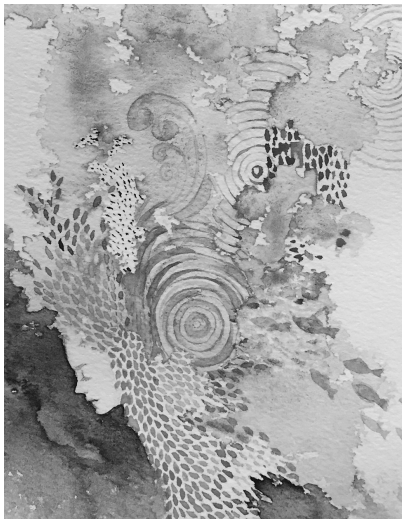
標点

気がついたらやっと原点に立っていた

県立倉敷まきび支援学校長
小田幸伸



私は、高梁市の山村「西山」に生まれ育ち、今も実家は母が守っている。私が通っていた西山小学校は今年度いっぱいで閉校となる。中学校は既にない。断腸の思いで、両校の記念誌の原稿を書いた。一定の規模で教育を行うための苦渋の選択だが、遠くの学校へバスで通う子どもたちのことや地域の存続のことを考えると、そのダメージは小さくない。

社会人となり勤務した職場の内、備中町教育委員会、高梁教育事務所、倉敷教育事務所もなくなった。平成の大合併や行革等によるものだ。社会教育、学校教育をより充実させようとするとき、失われたものの大きさを実感した。

新設も経験した。倉敷と岡山が合併した岡山教育事務所。三月三十一日の夜、人事異動に伴う給与等の事務処理をやっと終え、何もない事務室で閉所を宣言し、次の日の朝には、事務所開きであいさつをしながら、この二日間は、いったい何なのかと思っていた。倉敷まきび支援学校の新設も経験させてもらった。ハード面を短期間で準備しながら、教材・備品、教育課程、給食、スクールバス、関係者への周知など、やることは山ほどあったが、スタート時の学校の風土づくりにはこだわった。

廃止と新設を多く経験し、痛感していることがある。それは、ミッションだ。それまで存在していた組織がなくなる度に、その存在がどれほどの意味を持っていたか鮮明にわかった。また、新しく組織を作ろうとするとき、そのミッションについて、必死に突き詰め、明確にした。存続の危機なく安定した職場に勤務していた時には、あまり感じなかった職場のミッション。このミッションに頭（こうべ）を垂れ真摯に向き合い、組織の進む方向を明らかにしたり、大きな決断をするときの判断材料にしたりしなければならない。

今の職場のミッションは、子どもたちの自立と社会参加だ。これに向かって忠実に学校を運営していると、地道な実践が積み重ねられるだけでなく、特別なことをしなくても、新たな取組だったり、改革につながったりもする。

三十八年間働いて、退職間近の今、気がついたら、やっと原点に立っていた。